

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈いじめ〉をめぐる主体形成：山田詠美「風葬の教室」論
Author(s)	秦, 光平
Citation	表現技術研究, 17 : 29 - 42
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52324
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052324
Right	
Relation	



〈いじめ〉をめぐる主体形成

—山田詠美「風葬の教室」論—

秦 光平

はじめに

一九八〇年代中盤、日本において〈いじめ〉が社会問題化した。それ以来、〈いじめ〉は数多の文学作品の中に描かれてきたが、その〈いじめ〉表象史の本格的な研究は未だ十分に為されていない。〈いじめ〉をめぐる今もなお交わされ続けている言葉に、文学はいかに関わっているのか。それを明らかにするためには、〈いじめ〉表象を実践した作品群への読解を積み重ねていく必要がある。本稿では、その作業の一端として山田詠美の短編小説「風葬の教室」(一九八八年)を取り上げ、分析評価を行なっていく。

山田詠美には〈少年期・少女期から性と死に目覚める青年期にかけての、デリケートな年代を描く大きな系列〉⁽¹⁾があり、中でも「風葬の教室」は〈いじめ〉の問題を最も前景化させた作品である。作品発表の時期を考えても〈いじめ〉を最初期に取り上げた小説と目することができ、〈いじめ〉表象史における重要度のきわめて高い一作であることは間違いない⁽²⁾。

実際、これまでも多くの先行研究によって本作の意義は語られて

きている。しかし、〈いじめ〉問題への研究成果が蓄積された今日の眼から見ると、本作には〈いじめ〉の表現として再考に値する疑義が見出される。本稿では、まず第一節にて、その疑義の根拠を先行研究の概括とともに明らかにする。その疑問を受け第二節では、本作の語りに存する特徴や問題点を本文に即して指摘する。そして第三節にて、同時代の〈いじめ自殺〉にまつわる言説状況を参照しながら本作の意義を再評価していく⁽³⁾。そのようにして本作を読み替えていく作業は、冒頭に述べたような〈いじめ〉表象史の研究にも繋がっていくものと期待している。

一 「風葬」の陥穽

「風葬の教室」の梗概は以下の通りである。

小学五年生の「私」⁽⁴⁾ 本宮杏は、地方の小学校に都会から転校してくる。方言も使わず、可愛らしい洋服をいつも着ていた杏は、男子生徒から「気取ってる」とからかわれつつも、羨望の眼差しを集める。

ところが、女子生徒から人気のある体育の吉沢先生が「可愛い女の子が入ったな」という言葉を杏に掛けたために、女子生徒たち、特にクラスを中心人物である恵美子の反感を買ってしまう。次の日から杏はクラスで〈いじめ〉を受けるようになる。〈いじめ〉はエスカレートしていき、ついに杏は自殺を決意する。

しかし、いざ自分の部屋で実行に移そうとしたとき、階下から母と姉の会話が聞こえてくる。姉もまた昔〈いじめ〉を受けており、そのときは「いじめっ子連中を、自分の心の中で、ひとりひとり殺していった」のだという。その会話に強い印象を受けた杏は、自殺を思い留まる。そして次の日から、杏は姉の言葉を反芻しながら、自分をいじめるクラスメイトたちを軽蔑し「風葬」するようになる。そのことにより杏は教室の空気に反抗し、生き延びることができたのだ。

以上の梗概に示したように、本作は、〈いじめ〉被害を受け自殺を企てるまでに追いつめられた少女・杏が、心の中で〈いじめっ子連中をひとりひとり殺してい〉(二六六―一六七頁)くこと、すなわち「風葬」していくことにより生き延びていく物語とまとめることができる。杏の認識を大きく転換させた「風葬」とはいかなるものであったのか。本節では、特にこの「風葬」に関する先行研究を概観し、本作をめぐる論点の存在を明らかにしていきたい。

日増しにエスカレートする〈いじめ〉に耐えかね自殺を決意した杏は、家で首を吊る道具を探しているときに偶然、姉が母にかつての〈いじめ〉体験を軽い口調で話しているのを耳にする。そこで杏は家族の存在を再認識し〈これじゃあ、死ねない〉(一六八頁)と自殺を思い留まる。そして翌日、ある男性教員が冗談で口にしたわざと血を吸わせ

てから嗜虐的に蚊を叩き潰す挿話(一七四頁)に姉の言葉を重ね合わせ、加害者たちを「風葬」する術を体得するのである。

自身も〈何故、こんなことに気づかなかったのでしょう〉(一七三頁)と吐露する通り、姉の話は杏に多大な影響を与え、渦中にあつた〈いじめ〉体験への読み替えを促す。この点について海老原豊は〈自殺すら考えた杏を救ったのは、「教養のある、それでいて男の可愛さを残している父」「ふわふわと少女趣味やお茶目に生活を浸しているあどけない母」「若くてすでに大人の女の潔さをもにした姉」(一三七頁)、つまり家族だ〉⁽⁴⁾と述べ、その読み替えに際し家族という別の価値観が介入したことを重要な契機と捉えている。加えて、男子生徒・アツコの靴に倒錯した欲望を抱くことにより、杏が〈相手と自分、他人と自分が未分化のまま他に共有され、〈自我未分〉の意識のなかで異者を排除し、「狂気」の集団と化していた〉⁽⁵⁾教室の中、〈自己の「芯」に基づいた自己自身のオリジナルな欲望、及び「快楽」を獲得〉し〈いじめ〉の構造を真に克服)⁽⁶⁾し得たとする田中実の指摘も重要である。

これら海老原、田中の読解が見出しているのは、〈いじめ〉を生み出す教室内部の秩序を外的な契機によって相対化する構図であり、強固な〈いじめ〉構造を解体する論理としてきわめて筋の通ったものである。このように、本作は被害者自身にも内面化された〈いじめ〉空間の秩序を理に適った形で解体するのみならず、その契機となる外的要因の実際を「家族」に加えて「男子生徒の靴」という独自のものに宿している。〈いじめ〉被害者の内的事情に関する固有の論理を紡ぎ出している点において、本作の完成度は揺るぎないものと言えよう⁽⁷⁾。

一方で、杏の手にした「風葬」に対し若干の疑義を呈する論者も存在する。たとえば伊藤氏貴は、次のように本作を評している。

ここではまだ〈地獄〉の一丁目だが、もっと深くはまり込んでしまった場合はどうだろう。つまり〈孤絶〉が〈永遠の現在〉と思われるようになってしまった場合である。

ひとつには、その状態を〈孤絶〉ではなく〈孤高〉であるとして読みかえるという方法がある。いじめてくる相手をどうしようもなく卑俗な人間として蔑みまた憐れむのである。(中略) 自らの主観を変容させることにより〈地獄〉から救われた例である。だがしかし、これはそもそも〈孤高〉に堪えうる誇り高き人間しか採れない方法だろう。(8)

伊藤は、「風葬」を〈いじめ〉被害による〈孤絶〉を己の内面にて〈孤高〉に変換し自尊心を保つ方法と理解しており、この点では海老原、田中の見立てと共通している。しかし、伊藤の付している〈これはそもそも〈孤高〉に堪えうる誇り高き人間しか採れない方法だろう〉との留保は一考に値する。多くの先行論にて保証されていた「風葬」の有効性が〈そもそも〈孤高〉に堪えうる誇り高き人間〉のみに限定されるものとしてマイナスに捉えられているのである。

確かに、今日的な観点からすると、本作のもつ自己責任論的な側面は無視できないところであろう。一旦は外部に向けて相対化された〈いじめ〉空間の秩序は「風葬」の獲得によって再び杏の内面の問題へと収束していく。本作の展開を「いじめ」被害者が自身の主観を変

容させることにより〈いじめ〉を克服する物語」と把握するならば、それは〈いじめ〉被害者個人に〈いじめ〉解決の責任を押しつけていく構図に限りなく近づいてしまうのである(9)。杏が「風葬」を手にする作品内論理は確固たるものであるとしても、その作品内論理がどのように表現されていること自体への評価には未だ再考の余地があると考えられるのだ。

本稿ではこうした疑義にあくまでも留まり、「強い主体」とも言うべき杏の性質についてひとつの観点を提示していきたい。そのためには何をおいてもまず「大人びている」「孤高」等と評されてきた杏の語りをじっくりと読み直していく必要があるだろう。杏は自身の被害経験をいかに語ろうとしているのか。次節より考えていきたい。

二 「強い主体」への欲望

本作は、「風葬」の術を得た直後の時点から(10)、〈鳥獣戯画という素敵な絵を社会化の教科書で見たことがあります〉(九七頁)と語り起こされる。その語りの中で杏は終始、周囲の人々に比べて自分が大人びた存在であると主張しているように見える。東京から地方の小学校へと転校してきた杏は周囲との違いを鋭敏に感じ取り、〈彼らのやることは、私には容易に予測がつくのです。彼らには、人生経験がたりないのです〉(二〇八頁)との意識で周囲を眼差ししていく。杏において自分と周囲との違いは、専ら人生経験の差Ⅱ大人と子供の違いとして認知されていくのである。たとえば次に引用する箇所は、そうした杏

の思考様態をもっとも端的に表している。

私は人間には大人と子供という分け方があるのだといつも思
います。それは、もちろん実際に年齢をとっているかどうかとい
うことは関係がありません。あの人は子供、あの人は大人。私
は自分にとって少し簡単すぎると思われる授業の時は、いつも人
々を大人と子供に分けて遊んでいました。(一一三頁)

着目したいのは（私は自分にとって少し簡単すぎると思われる授業
の時は、いつも人々を大人と子供に分けて遊んでいました）との回想
である。後に杏は「風葬」に際し（私は、自分たちを人間だと思っ
ている愚かな者たちを、まず動物にまでおとしめます、そしてから、じ
わじわと殺して行くのです）(二七六頁)と語るようになるが、この回
想は、周囲よりも長じた存在としての自身の性質が（いじめ）体験の
以前から一貫したものであったことを主張するものといえる。杏のこ
うした自己規定こそが、前節にて参照した伊藤氏貴による「風葬」と
は（そもそも（孤高）に堪えうる誇り高き人間しか採れない方法）な
のではないか、という疑問の根拠になる部分といえよう。

しかしながら、杏の性質は、自身の規定の通り（いじめ）体験の前
後に一貫しているものと捉えるべきものであろうか。ここから示して
いくように、杏の語りにおいて、体験の当時と語りの現在とで認識に
少なからぬ変遷が生じていることも読み取れるのである。

（いじめ）に対する杏の思索には、妙に突き放したようなところが
ある。自身に害を与える具体的な個々人を時には免罪すらするかのよ

うな形で教室の空気が分析されていくのだ。もっとも典型的なのは次
の箇所である。

誰もが、何故、私をのけ者にし、ただ教室に座っているだけの私
に不快感を与えようとするのか、本当のところ、解つてなどいな
いのです。ただ痒いような気がする。皆が感じていたのは、これ
だけだと思えます。そして、それを誰かが引つ掻く。すると、本
当の痒さが生まれる。だから、また引つ掻く。すると、もうたま
らなくなつて一斉に爪を立てる。もう爪たちは掻かなくてはいいけ
ないという強迫観念に駆り立てられ、わけも解らずに、ただただ
憑かれたように指を動かさざるを得なくなるのです。

(二三一—二三二頁)

引用文の最後に至つて、一文の主語が「爪たち」となっていること
に着目したい。ここで杏は、自身が（いじめ）を受ける理由が特定の
個人による個別の行動に求められることを拒絶し、痒いような気がす
るから引つ掻くという同語反復的な集合無意識Ⅱ「強迫観念」こそが
（いじめ）を生んでいると思案している。自らに加害する（いじめ）
空間への分析に際して、その個々人への憎しみはかくも抑制されてい
るのだ。

同様の分析は、担任であるひとりの女性教員に対しても向けられて
いる。杏のことを（好きでも嫌いでもな）く、（生徒の中に好きな子を
見つける程、熱心に仕事をしているという雰囲気では）(二三四頁)な
いというその女性教員は、杏を嫌悪する教室の空気を鋭敏に感じ取り、

杏に強く当たる戦略を無意識に取るようになっていく。その教員の心理について、杏はまずは次のように解釈する。

ところが、この先生が、いけないことに、教室内での私の立場を徐々に感じ取ってしまったのです。彼女の元に、子供の作る私への嫌悪の波が寄せていつてしまったのです。子供たちに迎合した方が楽であることを悟っている彼女はどうか。やはり、楽な道を選びました。つまり、事あるごとに私を叱り始めたのです。(中略) そうすることは、教室での彼女の立場を快適なものにするのでした。彼女を憎むことは、私には出来ません。私が水のような人生を望んだのと同じように、彼女も波に逆らわない安楽な生活を望んだのですから。(二三四—二三五頁)

教員において杏への嫌悪とは、杏の解釈によれば、自らの内にあらかじめ確と存在するものではなく、教室の空気へと迎合することによって事後的に生起するものである。教員個人の「事あることに私を叱る」という行為に先立つ諸悪の根源としての「嫌悪の波」が意識され、同じ空気の中に棲息する者として「彼女を憎むことは、私には出来ません」と、教員の心理に理解すら示していく。しかし、その直後、杏は教員個人へと感情の照準を合わせる事となる。それは教員が「こんな育ちの悪い子、見たことないわ!!」(二三七頁)と、家族への否定を含む悪意を杏に向けたためであった。

この時、私ばかりでなく、私の父も母も、そして姉までも、私

を取り巻くすべてのものが、否定されたのです。私は、さまざまに嫌がらせを受けてきて、初めて涙ぐみました。それは、あの教養のある、それでいて男の可愛さを残している父や、ふわふわと少女趣味やお茶目に生活を浸しているあどけない母や、若くて既に大人の女の潔さをものにした姉、この魅力的な人々に対する愛情と、それをたつたひと言で踏みじった人間への憤りの気持ちからでした。(二三七頁)

先程まで自分自身をも含み込む教室の空気を冷静なまでに分析していた杏の語りには「涙ぐむ」「憤り」といった感情表現が入り込んでくる。このことから分かるのは、杏の語りには「いじめ」を生む構造に対する俯瞰的な眼差しと、その空気の中で自身の感情を揺すぶる具体的な加害者個人に対する眼差しとが両立する形で体现されているということだ。このように二重化した目線が生じたのは、本作全体が「風葬」という方策を発見した直後に語り直されたものであるためと考えられよう。「いじめ」を受けたまさにその当時の痛みが思い出される際にはその被害の具体が個人に即して語られ、それら個々の加害に関する分析が俯瞰的に述べられる際には個人を取り巻く構造への思索が冷静に語られる。そして、それら二重化した目線を孕んだまま、語り「風葬」の獲得と、そのことによる教室への反撃へと向かっていくのである。

こうした点から、「風葬」に関して、杏がもともと強い主体性をもつ人物だったからこそ可能になった認識の転換であったとする見解に本稿では与しなないでおきたい。杏の語りが体现している「強い主体

像は、杏という人物自身がそうであった実際というよりも、杏による自分自身への再解釈の賜物であったと考えるべきである。そこに表現されたのは、〈いじめ〉に興じる集団からは遊離した強い主体であろうとし、かつ、そのようなあり方により〈いじめ〉を生む構造自体への反逆すらも可能になることへの欲望だったのである。

ただし、こうした杏の自意識／欲望には一抹の危うさが混入している。「風葬」の術を得た後、杏は〈私は、そんな姉が大好きでした〉（一一〇頁）と公言して憚らない姉の思想を自らのものとして引き継いでいくが⁽¹¹⁾、自身の強い主体性を語る杏の自意識は時としてあまりに過剰になりすぎてはいないだろうか。実際、この変化を経る以前、〈いじめ〉被害のまさに只中にあつた時点では、姉を含む家族に抱いていた感情が決して満たされたものばかりではなかったこともテクストには示されているのである。

家に帰ると、私は姉に、まず下着の話をしました。姉は、夕食前のワインを飲みながら、けらけらと笑いました。

「男つたらしなんて、最高の誉め言葉じゃん。私ですら、あんたの年齢で言われたことなかったわよ。素質あるわよ、杏」

私は、これは何を言っても駄目だと思い、あきらめました。私の家族は人の悩みを自分のものと置き換えて考えてくれる程、親切ではなかったことを思い出しました。私は、食事中、しょんぼりと孤独を噛みしめていました。（中略）姉の言葉は少しも、私を明るくさせません。私の可愛いショーツがいくら勝っていると言ったって、私以外の全員が木綿のでっかいパンツをはいていたら、

私は負けたのと同じことなのです。小学生の世界に絶対的な価値など存在しないのです。（二二七―二二八頁）

〈私の可愛いショーツがいくら勝っていると言ったって、私以外の全員が木綿のでっかいパンツをはいていたら、私は負けたのと同じことなのです〉との語りは、教室に充満する同調圧力に杏自身もまた取り込まれていたことを物語っている。重要なのは、その渦中における杏が、家族の反応に〈しょんぼりと孤独を噛みしめ〉、〈姉の言葉は少しも、私を明るくさせ〉ないことを自覚している点である。

本作にて家族は結果として「風葬」の術を杏に気づかせることとなるものの、杏の〈いじめ〉被害に対し直接的な援助をすることはなく、家族に対し、好意とともに引用部のような不満をも同時に抱く杏が、その不満ではなく好意の側を採用するためには、他人の援助を借りず自分自身の主体性により被害を克服していく価値観を身につける必要があつたことも推定できよう。また、作中には「中年の女の人」⁽¹²⁾「老婆」⁽¹³⁾等の言葉がマイナスの比喻として用いられている箇所があるが、それは、周囲の援助を頼る／頼らざるを得ない存在であることを拒絶し、「魅力ある女性」としての主体性を自ら主張することのできる者にしか存在価値がないかのような自意識と表裏とも考えられる。杏は、当面の〈いじめ〉被害から生き延びることと引き換えに、過去の自分自身も含めた弱者の存在を棄却してしまっているのである。

以上のことから、前節にて示したような留保は、本作の語り行為遂行性を根柢に改めて付されておくべきものであろう。一方で、本節に示したものは別の観点から本作を再評価することも可能である

と考える。次節にてその評価を、強い主体としての杏の特徴を、同時代の〈いじめ自殺〉における主体形成のあり方と比較することによって示していきたい。

三 〈いじめ〉をめぐる幻想

前節では、杏における強い主体としての性質を、〈いじめ〉体験以前からあらかじめ存在したものとではなく、「風葬」の術を獲得して以降の語り直しの中で事後的に形成されたものとして捉える読みの可能性を提起した。そして、杏の強い主体たらんとする欲望の表出に一抹の危うさがあることを示し、その点で、本作への評価に留保を付す必要性を示した。

しかしながら、最終的に杏が採ることとなった強い主体としての姿が、〈いじめ〉を経て死ぬためではなく生きるために必要とされたものであることの意味はやはり大きい。杏は自殺を決意した後、「ママ、パパ、おねえちゃん。／先立つ不幸をお許し下さい。／杏は、人生には似合わない子です。」（一六〇頁）との書き出しで遺書を用意しようとする。その遺書には「私は、あの教室のために死ぬのです。あの私たちの宗教を否定するために命を絶つのです」（二六四頁）等と語られるような目的が明確に存在していた。その最も特徴的な点は、次の箇所¹に端的に表れている。

私が死ぬからには、誰かが損をしなくてはなりません。原因不

明で自殺するなんて、まっぴらです。誰かのせいで死んだことにならなければ、私が浮かばれないではありませんか。私は、恵美子の名前は絶対に抜かすことは出来ないと思いました。でも、私をいじめたのは、彼女ひとりではありません。クラスの女の子全員。でも、そう書いてしまうと、衝撃度が薄れるような気がしました。女子全員を書け。私は、別な紙に、そうメモしました。男子全員も。私は、メモにそう書き加えました。ただし、アッコを除く。

それから、彼らが私に対して、どういう行いをしたかも、書かなくてははいけません。これを書かないと、世間をあつと言わせることが出来ません。（一六一―一六二頁）

遺書を書くこととすることに、〈いじめ〉の加害者たちを告発し、復讐する目的があるの言うまでもない。しかし、杏はそれに留まらず、「でも、そう書いてしまうと、衝撃度が薄れるような気がします」（これを書かないと、世間をあつと言わせることが出来ません）といった独白からも読み取れるように、教室の外、世間に対しても自身の死が影響を及ぼすことを望んでいる。杏は最終的には、こうした自殺の願望に背を向け「風葬」とともに教室で生きていくことを選択する。ならば、「風葬」により杏が距離を取ったのは〈いじめ〉それ自体だけでなく、遺書に表れているような〈いじめ自殺〉への願望であったと考えることもできよう。では、その〈いじめ自殺〉への願望とはいかなるものであったのか。

日本において〈いじめ〉が社会問題化する契機となった「中野富士

見中学いじめ自殺事件」(一九八六年)が耳目を集めたのは、被害者自身による遺書が残されており、そこに自身の死と(いじめ)との因果関係が明示されていたためである。このことにより従来「いやがらせ」「からかい」等と軽んじられていた問題行動群が(いじめ)の語に括られ、死すら誘発する暴力であると認知された。この社会問題化により不可視化されていた数多の暴力が顕在化された功績は疑うべくもなく、この問題化自体の有効性は現在に至るまで確かなものである。しかし一方で(いじめ)から死への因果関係が自明化し、扇動的に(いじめ)が語られていくにつれ、その問題化は少なからぬ副作用をも生んでいった。

教育社会学者の山本雄二は、社会問題化以降に(いじめ自殺)をした生徒の遺書を複数⁽¹⁴⁾、分析し、(いじめ自殺)における遺書に共通して(自分の死がいじめをなくすための一種の殉死(意味のある死!)であることが示唆されており、その語り口には加害生徒を諭すような響きさえ感じられる)点から(この死が強いられたものであることはどの遺書のなかでも触れられている。それにもかかわらず遺書でそのことを語るその姿はまるで別人のように強い、あるいは超然としている。そこでは何が起こっているのだろうか)⁽¹⁵⁾との疑問を表明している。山本の分析によれば、それは、遺書という場で(いじめ被害者)としての主体形成が実行されているためだという。

彼らはずから死というかたちで個別的な自己の存在を「いじめ」「言説のなかに投じ入れること」によって真正正銘の「いじめ被害者」になったのだ。「いじめ」言説による呼びかけに能動的に応

答することによって「いじめ被害者」としてリアルな存在すなわち主体になったといってもよい。そして言説内主体として自己と社会とを同時に語る資格を得た。「いじめ」言説内に主体として肯定的に位置づけられた被害者は、正義は自分の側にあり、加害者には一分の理もない、そのような位置から語ることが可能になり、しかも語るることによって過去の私的な苦しみ(それゆえ他者にとってはリアルでなく、したがって他者には理解できない苦しみ)は他者にも理解可能な苦しみとして普遍化されている。そうした意味では遺書は「いじめ」言説内に生まれた新しい主体の自己表現であるともいえる。⁽¹⁶⁾

つまり、もともとは不可視の暴力を問題化するために提起された「(いじめ)は人を死に追いやるほどの暴力である」との認識が、「(いじめ)と死を結びつけることによって『意味のある死』を遂げることができる」という危険な欲望を誘発してしまったのである。山本自身、こうした認識が主流となってしまうことに(もともと「テキストを読む」ことから一歩離れてみれば、「死をもって主体となる」こと自体がそもそもきわめて深刻な問題であるのにちがいない)⁽¹⁷⁾と警鐘を鳴らしているが、「(いじめ)が「妥当な自殺の動機」として、自殺が「魅力的な告発の手段」として人々を惹きつけてしまう危険性は、(いじめ)を問題化するにあたり常に意識されなくてはならないものである⁽¹⁸⁾。

「風葬の教室」にて遺書を残そうとする杏の行為にも、同時代に浸透していた(いじめ自殺)への認識と同様の危うさが潜んでいる。杏

は、(いじめ)が原因で死を遂げることを明記し加害者集団を告発することにより(いじめ被害者)として「意味のある死」を遂げること、言うなれば「死ぬための幻想」に寄りかかる形での主体形成を行なおうとしてしまっていたのである。

したがって、本作にて杏が最終的に採った「大人びた」「孤高」の存在としての主体形成は、前節までに見てきたような陥穽を孕みつつも、やはり重大な意義をもつものと考えなくてはなるまい。本作は、杏による次の独白によって幕を閉じる。

私は今でも、野原を歩くのが好きです。私は地面を踏みしめて、草や木の匂いを嗅ぐのが好きです。私は、人生に茫漠と広がる死の寝床の存在を感じます。それは、とても心地良いのです。私の心は、相変わらず、とりこになる。けれど、草や木は私を殺すには、あまりにも若いだけの生きものなのです。(一七九頁)

この独白は(私は、この時、明らかに草や木に殺されているのです)(一〇二頁)と語られていた作品前半部の独白に対応し、杏自身の変化を象徴するとともに、同時代から現在に至るまでの(いじめ)言説に対しても鋭い視点を投げかけるものである。「死ぬための幻想」が抗しがたい魅惑とともに跋扈する社会状況の中で、「生きるための幻想」をいかに紡いでいけばよいのか、ということの実践例としての側面が本作には確かにある⁽¹⁹⁾。問題は、その実践のために、前節までに見てきたような強い主体性が本作では必要とされなくてはならなかったことである。「死ぬための幻想」を打破するために選ばれたのが、現

実的な援助ではなくあくまでも「生きるための幻想」であった点に、現実社会に対する本作の冷徹な眼差しを見出すことができよう。

おわりに

以上、山田詠美「風葬の教室」を(いじめ)問題との関連性に着目して読み進めてきた。第一節では先行研究を概観し、作中で杏が体得する「風葬」という術に対する評価に再考の余地があることを確認した。その上で第二節では、杏が「大人びた」「孤高の」存在としての主体形成を行なおうとしている語りについて解釈を示すとともに、本作への評価に留保が付される必要性を述べた。最後に第三節で、同時代の(いじめ)自殺に関する言説状況を鑑みるに、(いじめ)自殺にまつわるものとは別の主体形成のあり方を提示した作品として再評価できることを示した。

本稿は概して、本作の展開に自己責任論的な側面を見出し批判的に検討するものとなった。しかし、私たちがいま生きている社会自体、(いじめ)被害者本人に自己責任論を押しつけるような価値観からいかに距離を取り得ているだろうか。自身の弱さを認め他者に援助を求める姿勢は、今日においても必ずしも肯定的には見られない。だからこそ、(いじめ)体験の中で「そのように考えざるを得ない」強固な作品内論理とともに本作が提示した「強い主体」としての(いじめ)被害者像には、今日においてもなお持続する現在性が含み込まれているのである。

注

- (1) 江種満子「作品鑑賞」(『短編女性作家現代』おうふう、一九九三年一月、二二頁)。同系列の作品としては他に『放課後の音符』(一九八九年)や『ぼくは勉強ができない』(一九九三年)等が挙げられている。
- (2) 『文藝』一九八八年春季号に初出ののち、『風葬の教室』(河出書房新社、一九八八年三月。一九九一年七月文庫化)、『蝶々の纏足・風葬の教室』(新潮文庫、一九九七年三月)に再録された。本稿では新潮文庫版を底本としており、引用文中の傍線、中略、注はすべて筆者が施したものである。底本より本文引用をする場合には引用文の末尾に括弧書きで頁数を示した。
- (3) 「いじめ」の語は現代日本において一般語として定着していると言つてよいものの、本論にて述べていくような構築性を前景化させる意図により、本稿では「いじめ」と山括弧を付す表記とした。
- (4) 海老原豊「空気の戦場——あるいはハイ・コンテクストな表象——空間としての教室」(限界小説研究会編『サブカルチャー戦争「セカイ系」から「世界内線」へ』南雲堂、二〇一〇年一月、三三二頁)。
- (5) 田中実「フレイシズムの誕生——『風葬の教室』」(『国文学解釈と鑑賞』五六巻八号、一九九一年八月、一七四頁)。
- (6) 注(5)と同じ、一七六頁。
- (7) 伊藤氏貴「善き「いじめ文学」のための一章 いじめ空間という地獄」(『現代思想』二月臨時増刊号 緊急復刊 Jimgo いじめ学校・社会・日本』青土社、二〇一二年一月、一六七—一六八頁)。
- (8) 他の多くの先行研究もまた、この「風葬」による認識の転換を肯定的に評価している。増田正子は本作について「少年・少女物語の多くが、一種の成長譚をなすことから、このテクストも「子ども」が何らかの通過儀礼を克服し成長する物語であると仮説できる」(『風葬の教室』(山田詠美)を読む——少女「杏」の死と再生の物語『日本文学』四四巻六号、一九九三年、六六頁)と述べ、杏の変化を「成長」とプラスに意味づけている。深谷純一も「注・杏の姿が魅力的であるのは、そんな杏の生き方の中に、同質化を強いる今日の学校体制(受験及び校則)から抜け出し、新しい世界を切り開いていく可能性を見るからである。それは、いわゆる「協調」とか「連帯」という、人を同質化させる方法とはまったく違う、自立した「個」同士の関係に立ったものだからだ」(『風葬の教室』(山田詠美)を授業で読む『日本文学』四二巻四号、一九九三年、七〇頁)と、杏の変化を肯定的に捉えている。
- (9) 「いじめ」の解決・対応を個人に委ねることの問題については、社会学者の内藤朝雄が「ひどい理不尽に対してされるがままでいるしかない、無力でみじめな者は、この耐えがたい、生きがたい体験の意味を、それでも「生きうる」、さらには「生きるに値する」ものへと変造しがちである。(中略) 生きがたい小社会の「自分たちなり」の秩序のなかで、理不尽にいじめられ、そ

の理不尽をされるがままに耐えるしかなかったみじめな者たちは、しばしば、このような苦勞をしたことよって自分は「タフ」になった、というふう¹⁰に体験を加工する。(中略)つまり、本来は自分のダメージを最小限にとどめるための戦略(計算のひとつの「解」にすぎない「耐える」というかたちを全能筋書に用いて(流用して)、「タフ」という全能の「強さ」をこの身に具現しようとするのである。されるがままになるしかないみじめさが、されるがままであり続ける「強さ」にすりかえられる(『いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか』講談社現代新書、二〇〇九年三月、一二五―一二七頁)と述べている。(いじめ)被害者は、(いじめ)に耐えるため「いじめに耐えること¹¹で自分は強くなったのだ」と考えざるを得ない。しかし時に、その防衛の過程で(いじめ)自体までもが「自分を強くするために有意義な、必要な経験だったのだ」という認識にすり替わってしまう。結果として誠に皮肉なことに、誰よりも辛い痛みを覚えたはずの(いじめ)被害者自身よって「(いじめ)は必要悪である」式の言説が再生産されてしまう場合があるのである。

(10) 本文中に(恵美子は、ここのところ沈みがちです)(一七八頁)とあるため、本作の語りの現在には「風葬」の術を体得し、教室の空気に反逆することが可能になった直後であると考えられる。また、「風葬」による成功体験の直後に語り起こされたものであることから、過去の経験がいま現在の自分にとって(あるいは実際以上に)有意義なものであったかのように語ろうとし

ている可能性も推定できよう。そのことにより、杏の語りにおいて自身の強い主体性が肯定的に語られることの必然性が担保されているともいえる。

(11) 杏にとって姉の思想を引き継ぐことは、(いじめ)を受けるとき(女くせえんだよ)という言葉を向けられたり(一二二頁)、自身の濡らされたスリッパを頭から被せられたりする(一五六頁)ことにより自らに加害する手段として奪われ、貶められていたものを再び自分自身の資質として取り返していくことも意味していた。この点について有田和臣は「(女性の身体)を奪還する少女——山田詠美「風葬の教室」と一九八〇年代のフェミニズム動向——」(『京都語文』二〇一九年一月)にて、杏の身につけていた服装・アイテムに同時代のフェミニズム的な表象との共通性を指摘した上で、本作を(女性としての身体性を抑圧しようとする恵美子たち反動勢力による攻撃を経て、女性の身体を正のイメージで受け入れる自らの価値観の正統性を自覚し、それに基づいて生きる自信と意欲(欲望)を得る)(二一四頁)杏の姿を通して(従来男の視線を介してようやくとらえられていた女性の身体を、(美しきもの)として、女性自身の手で奪回することがめざされている)(二二六頁)、(フェミニズム小説の正統に属する作品(二二四頁)として評価している。同論は、(いじめ)の物語の外部にある、より大きな主題(二〇七頁)をフェミニズム批評の観点から明らかにしたものであるが、本稿にて問題化した通り、有田が論じるようなフェミニズム批評の枠組みでは肯定的に見られる強い

主体性の表出が〈いじめ〉を語る言葉としても有効であり得るかどうか、という点には再考の余地がある。この点については注(16)も参照されたい。

- (12) 本文には〈ところが、今日はどうも様子が違います。皆、したり顔で眉をひそめながら、こそこそと私を見て話しているのです。なんだか、道で井戸端会議をしているおばさんみたいだなあ、と私は思いました。女は本当に年齢に関係がありません。小学五年生の女の子たちが中年の女の人にもなれるのです〉

(一一二四頁)とある。

- (13) 本文には〈粉だらけの私には、もう泣くこともできません。はくぼくが入らないように目を見開いたまま、呆然と立ち尽くしている私は老婆です。多分、髪は真つ白でしょう〉(一三八頁)、〈私は、ただ、立っています。あつという間に老婆に变身した私は、まばたきも出来ずに立っています。(中略)可愛いリボンも、お洒落なブラウスも、清潔なソックスも、何もかもが、覆い隠された私は、やつと、皆の望むものになれたのです〉(一九九頁)とある。

- (14) 山本雄二「テキストと主体形成」(森重雄・田中智志編『近代教育』の社会理論』勁草書房、二〇〇三年四月、一四二―一四三頁)。

- (15) 注(14)に同じ、一四四頁。

- (16) 近年、ケア論の文脈にて、フェミニズム批評が女性の主体的な自立を推奨してきた歴史が、他者への依存と社会からの援助を必須とする弱者へのケアの必要性を軽んじる言説と共犯して

しまう問題が提起されている。たとえば小川公代は、この点について〈欧米でも日本でも、個が「自律/自立する」ことを重んじる価値観が多数派である一方、「依存する」あるいは「関係をむすぶ」というケアの価値観はまだ少数派のものである。資本主義社会において新自由主義的な文化が支配的な文脈では、〈ケア〉の価値が貶められてきた。一九六〇年代のフェミニズム運動によって、女性の経済的自立が推奨されるようになったことも、その傾向に拍車をかけた〉(『ケアの倫理とエンパワメント』「序章 文学における〈ケア〉」講談社、二〇二一年八月、一〇頁)との問題意識を示している。

- (17) 山本が分析対象としているのは〈ひとつは福岡県の中学二年男子のもの(一九九五年四月)、二番目は長崎県の中学二年女子のメモ(一九九五年四月)、三番目は東京都の中学二年生男子による遺書(一九九六年二月)〉(注(14)に同じ、一三八頁)である。

- (18) この問題については、北澤毅『「いじめ自殺」の社会学 「いじめ問題」を脱構築する』(世界思想社、二〇一五年三月)や北澤毅、間山広朗・編『囚われのいじめ問題 未完の天津市中学生自殺事件』岩波書店、二〇二一年九月)が批判的に論じている。また、本稿にて参照したのは〈いじめ〉から自殺への因果関係が自明化することによる〈いじめ〉被害者本人の意識への影響であるが、その因果関係が社会言説の側に及ぼす影響については伊藤茂樹『「子どもの自殺」の社会学 「いじめ自殺」はどう語られてきたのか』(青土社、二〇一四年九月)に詳しい。伊藤

は同書にて、社会問題化により社会的にイメージされる(いじめ被害者)像が固定化し、現実の事情から乖離した観念的な言説のみが行き交う場が醸成されていったことを問題視している。この点については口頭発表(「いじめ」)との距離——村上春樹「沈黙」論——(日本文学協会第四〇回研究発表大会、二〇二一年七月四日、Zoomオンライン発表)にて問題化した。

(19) この背景に、同時代に複数の現代作家によって、ある被害を「大したことではない」とみなすことにより加害自体を脱色するような言説的戦略が提起されていたことを想起しておきたい。たとえば松浦理英子は、レイプについて(私は戦略としてあえて、(レイプは女性に対する最大の侮辱ではない)(レイプなんかなんでもない)(レイプくらいで女はくたばらない)と言っていた)きたいのである(『朝日ジャーナル』一九九二年四月一七日号、四〇頁、傍点原文)と述べている。また、柳美里も(いじめ自殺)について(そのような論調でマスコミが報じるのは、いじめをなくしたいというキャンペーンなのでしようが、報道がアウンス効果となって自殺を反復させてしまうのです。また、報道する側の内部に自殺者に対する強い慶弔の念があり、それが子どものところに甘く響くのではないでしようか)(『自殺』文春文庫、一九九九年二月、一六三—一六四頁。初出:『柳美里の「自殺」』文藝春秋、一九九五年六月)との見解を示している。(いじめ)被害者が最終的に(けれど、草や木は私を殺すには、あまりにも若いただの生きものなのです)との自意識に至る様を「少女」という表象に託して表現した本作を、こうした

問題提起とも響き合うような小説表現のひとつとして捉え直すことも可能であろう。この点については機を改めて論じた。

(はた こうへい、広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期
在学)

***Ijime* (Bullying) and Subject Formation: An Essay on Amy Yamada’s “Fūsō No Kyōshitsu” (Classroom for the Abandoned Dead)**

Kohei HATA

Key Words: *ijime* (bullying), gender, suicide

Amy Yamada has published many works that describe the world from a young boy/girl’s point of view. Among these, “Fūsō No Kyōshitsu” (Classroom for the Abandoned Dead, 1988) highlights the problem of *ijime* (bullying), which became a social issue in Japan in the mid-1980s. Considering the publishing date, we can say that “Fūsō No Kyōshitsu” was among the earliest novels to address the issue of *ijime*, and certainly one of the most significant.

Many previous studies have discussed the importance of this novel. However, from the perspective of contemporary research on bullying, “Fūsō No Kyōshitsu” has certain aspects worth further consideration, particularly whether the plot development, which seems to resolve the problem of *ijime* by transforming the victim’s subjectivity, is akin to self-responsibility theories that put responsibility on the individual victim to deal with bullying.

In this paper, I discuss this problem by focusing on the image of the narrator An’s image as a “strong subject,” described as “mature” and “lonely.” Furthermore, I re-evaluate the significance of this novel by comparing it with the discourses on the subject formation regarding “*ijime* suicide” from the same period.